

山の景色

り揃えていく。自分の生活のために倒れてくれた木々の、枝の先まで、そのいのちを活かすのは当然である。80 cmの長さに切り揃えた小枝は、我が家に持ち帰った後、さらにその三分の一の長さにして、小さな薪棚に積んでいく。薪ストーブの焚きつけ用で、私が最も気に入っている薪棚である。何年か前、北海道のアイヌ集落、二風谷を訪ねた時のことである。民家の軒下に、この小枝の薪棚があるのが目にとまった。大自然と調和した文化を持つアイヌの人々も、同じようなところで、この小枝を使っていると思うと嬉しくなった。

その日倒した木を切り終わり、山の斜面に80 cmに玉切りした木と柴を、井桁状に積み上げる。80 cmの高さにすれば、おおよそ0.5 mである。春の日射しが強まり、積もっていた雪が固まってきた頃に降ろすことになる。

こうして、笹刈り、伐倒から玉切り、そして積み上げまでが終わった後、斜面はすっかりきれいになっている。山の恵みを丁寧にご利用すればするほど、山はきれいになるものがある。

短い冬の陽は、もう西に傾いている。その陽が射して、向いの山は輝いている。この景色を見ながら、大昔の人と同じ景色を見ているんだなど、大自然の時の流れの中にいる自分を感じ、嬉しくなる。

景色というものは、同じ景色でも、自分のやっていることによつて、全然違つて見えるものだ。三十年程前、岩手県八幡平で、フィールド実験のため、月の大半を過ごすことが、何年か続いたことがあつた。八幡平は、それ以前にも観光で何度も訪れていた。しかし、フィールド実験の行き帰りで見たその景色は、観光で見た景色と全く違つているのに、我ながら驚いたものである。同じ景色を見ていても、人それぞれ、そして同じ人であっても、観光なのか、登山なのか、林業なのか、あるいは土木作業なのか等によつて、見え方が違う。もしかすると、観光では何も見えてないのかも知れない。

私が木を伐っている一帯の山は、薪炭林である。何百年にわたり、数十年周期で伐採さ

れ、更新されてきた。これらの山が、最後に伐られたのは50〜60年前である。その頃は、このあたりでは、チェーンソーはまだ普及していなかったので、人々は、それまで、何百年にわたり、ノコギリや斧で木を伐っていたことになる。作業を終えて斜面に座り、向いの山を眺める。向いの山も、同じようにして伐られた山である。疲れを癒しながら、その林容を読み解き、その山が伐られた頃の事を思ったに違いない。その山を伐った当時の人も、同じ思いで、別の山を眺めたことであろう。そして、ノコギリストの私も、その末席を汚して、昔の人と同じ景色を見ている。

現代人は、この数十年の間に、昔の人が使っていないような道具を使い、やっけないような仕事ばかりするようになった。このため、同じ景色であっても、決して昔の人の見た景色は、見るができない。

一休みの後、山を降りる前に、もう一度、今伐った斜面を眺め、次に伐る木を見定める。そして、次に来るまでの間、これらの木をどのようにして伐つたらよいかを、頭の中で、あれやこれやと考えることになる。イメージ・トレーニングである。獲物を追う猟師、山を究めようという登山家も、同じ思いなのだろうか。